死は誰にでも、終わりは何にでも

すどうりな

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

可愛い身体に可愛い妹……　それとかなりの非日常？

大事な家族を守る為、リリカルマジカル頑張るで！

目次

八神家の長女 ―― 1
日常の中に ―― 7
魔法の呪文は？ ―― 13
死を視る眼 ―― 20
青い宝石 ―― 27
殺人鬼の探求心 ―― 34
海よりも深く ―― 41
短くて長かった軟禁生活 ―― 49
幕間　私の幸せ ―― 56

八神家の長女

『ソレ』を見ていた。
何処までも真っ暗で……　真っ暗という言葉が陳腐に聞こえてしまう位に黒いナニかを俺(わたし)は見ていた。
体は解け、周りの暗闇と同化し、最早俺(わたし)には眼もあるか解らないのに……　それを『視』ていた。
暗く、他にやることの無い暗闇でずっと見ていたのだ。
『見て』『視て』『観て』……　それでも解らなかったから『ミテ』……　何時までもミテいた。

……　不意に視線を感じ、黒い『ナニか』穏やかで暖かい黒い『ナニか』からメを離し上を見上げる。

誰かが私(おれ)を見ていた。
私(おれ)が『ナニか』を見つめる様に、誰かも私(おれ)を見ていた。
生気の無い目、まるで死んだ様な『眼』で私(おれ)を……　いや、私(おれ)がいる暗闇全てを眺めていた。
暫く誰かを見つめていたが変化は無い、暗闇にまみれた此処からじゃよく見えないし、相手だって私が見えていないに違い無い。
変わらない『誰か』から眼を離し再び『ナニか』へと視線を動かす。

……『ナニか』がこっちをミていた。

ソレは少女だ。　暗闇の中、ハッキリとミえた少女。
黒い髪、赤い眼……　白い肌。
慈愛に満ちた顔で自分を抱き締めた彼女は、まるで子供をあやすかの様に私の頭を撫でる。
ソレだけで『解放された』気がした。
重い何かが外れクリアになっていく視界、そのくせ意識が遠退く不

思議な感覚。
やがて彼女をミている事すら出来なくなり……　私の視界は黒く染まっていった。

――――おはよう、私の愛しい……

誰よりも慈愛に溢れた彼女の声を……　私は最後まで聞く事が出来なかった。

ガタンッ……　という大きな音で目が覚めた。
まず視界に映ったのは誰かの顔だった。　ムッと頬を膨らませた彼女は如何にも不機嫌そうに口を開く。
「悲しいなぁ……　しきは私の話なんか聞きたく無いんやな……　はぁ……」
「え!?　違う、違うんや!　そう言う訳や無くて……」
「……　じゃあ、なんなん?　言い訳位なら聞いたるで?」
「急に意識が遠退いてな……　その、えー……」
言い訳を探そうにも今の言葉が全てだ、私は意識が遠退いてそのまま眠ってしまったのだ……　よりにもよって最愛の『妹』との会話中に。
頬を指で掻きながら何とか言い訳を捏造しようとする私……　だが良い案は見つからず時間だけが過ぎていく。
「あの……　せやな、うん……　あー」
「く……　くふふ」
私が返答に四苦八苦していると笑いを堪える様な音が聞こえた。
上を向いていた視点を妹に戻せば丁度彼女が吹き出すところだった。
「あははっ!　くふふ……　冗談、冗談や。　私としきは産まれた時からずっと一緒やんか、しきが朝　極端に弱いって事位知っとる」

「からかわんといてや……　うち、はやてちゃんに嫌われたかと思うて寿命が縮んだわ……」
「いくら朝弱い言うてもこんなに可愛い妹の話はしっかり聞くもんやで？　おあいこや、おあーいこ」
ニコニコと車椅子を押しながら機嫌良さげに台所にむかう妹（はやて）……　私の意識が飛んでいた間にどうやら朝食まで作っていてくれたらしい。
慌てて立ち上がり、はやてちゃんの後を追って台所に入る。
「朝にしきが台所に入っても大丈夫なん？　自慢やないけど私はしきが倒れても支えきらんよ？」
「いくらお姉ちゃんでも立ったまま寝るなんて事はせぇへんよ……」
炊飯器を開け、ご飯を茶碗に盛る。　はやてちゃんはちょっと少なめ、私は山盛りだ。
そのまま冷蔵庫から麦茶を出そうとしてはやてちゃんに怒られてしまった。　危ないから一度持って行ってからにして欲しいらしい。
確かにと納得した私は茶碗をテーブルに置いてからコップとお茶を運んだ。
席につき両手を合わせて食べ始める。
献立はだし巻き卵に味噌汁だ。
此処に納豆でも並んでいれば完璧なんだが……　買い忘れ絶賛品切れ中である。
「それで、今日はどんな夢やったん？　何時もの落ちこぼれ学生の夢？」
「ぐぅ……　お姉ちゃんの心に、はやてちゃんの無慈悲で的確な評価が突き刺さる……　一応お姉ちゃんやて頑張ってたんやで？　進路選びで楽出来るように……」
「そんな動機やから勉強も身に付かんかったんやない？　毎回言っとるけど」
ぐはっ！と、ややオーバーリアクションをした後に頭をひねって思いだそうとする。

何か重要な……　大事な夢を見ていた様な気がするのだがまるで思い出せなかった。
「普通の夢やったんやないかな？　しき、自分の夢やったら絶対覚えとるし」
「そうなんかなぁ……」

『落ちこぼれ学生の夢』　はやてちゃんがそう呼んだ私の夢は、私にとって夢であり過去でもあった。
産まれてからずっと、何度も何度も夢の中で思い出す私ではない私（おれ）の記憶。
口が軽かった昔の私はその記憶を簡単に喋ってしまい一時期ちょっとした騒動にもなったのだが今ではかけがえの無い思い出になっている。
かけがえの無い思い出。
……　両親が生きていた頃のかけがえの無い思い出だ。
「しき！」
「うぇっ!?　な、なんやはやてちゃん？」
「食事中に寝てまうのは危ないで？　はっはーん……　解ったで！　しきが落ちこぼれやった理由は授業中でも関係無しに寝てまうからやろ？」
どうや？　……　と、自信満々に言ってくるはやてちゃんだが言い訳させて貰いたい、今は昔を思い出していただけで寝ていた訳ではないと。
ちゃんと起きてましたー、と言いながら味噌汁に口をつけて驚いた。
旨い、少なくとも私が作るモノよりずっと。
姉より優れた妹なんて居ない……　そんな言葉が頭の中で砕け散るのを感じながら朝食は続いた。
「しきー」
「なんやー？」

「買い物行ってくれへんかな？」
「ええでー」
カチャカチャと握り心地の良い機械を弄りながらテレビに釘付けになっていた午後。
くるりとはやてちゃんの方に顔を向けて見れば冷蔵庫の中を見ていたのか台所から出てくる途中だった。
ゲーム機の電源を落とし背伸びをする……　こういう時オートセーブは便利だ。
「何がいるん？」
「牛乳と玉ねぎと、あとじゃがいもも……　うーん、それくらいやな。　あとは好きな物買ってきてもええよ」
「納豆とか!?」
「……　あーうん、ええよ」
何故か苦笑いを浮かべながらはやてちゃんからお金を貰って外に出る。　……　行き先は近くのコンビニだ。
なんのへんてつもない普通のコンビニ、でかでかと書かれた『7』の文字を掲げ全国に店を持つ有名なコンビニだ。
店に入りまず見えたのはレジで気だるげにしている店員と少し焦り気味に商品を棚に陳列する青年だった。
新人なのかこんな子供に頭を深く下げた後、再び品を陳列する彼を心の中で応援しながら飲み物の棚に手を伸ばす。
迷い無く一番高い牛乳を手に取る。　安い牛乳はあまり好みじゃないのだ。
近くにある野菜コーナーでも目的の物を問題なく手にし、向かう先は紙パック系飲み物のすぐとなり、納豆が置いてあるコーナーだ。
大粒、小粒、ひきわり……　今日その中から選んだのは大粒だった。　理由は特に無い、気分的に食べたかっただけだ。
「あっ」
青年の手から陳列しようとしていたサンドイッチが落ちる。　焦り過ぎだ、私は落ちるそれ手で受け取ると何事もなかった様にレジへ向かう。

精算を済ませレジ袋片手出口へ進む、呆然とした様子で私を見つめていた青年に小さく手を降り帰路についた。

「なんや、うちめっちゃ格好いいやん……　はーどぼいるどっちゅうヤツやな」

自画自賛してしまうが仕方がないのだ、まるで物語に出てくる強面だが優しいオジサンの様な行動……　ドヤ顔になってしまうのも仕方ない。

「しき……？　私、好きなもん買ってきてもええよって言うたけど……　二個も買ってきてええなんて言ってないで？」

……　帰って袋の中身を確認したはやてに怒られて仕舞うのも仕方ない事なのだ。

日常の中に

「これなんてどうや？」
私がはやてちゃんに見せたのは料理本だ。『納豆料理１００選』と書かれたソレは何とも意欲を膨らませた。
「しき……ソレ、もう家にあるで？」
「あ、あれ？　そうやったっけ？」
「自分で１０品位作った後に結局、直接掛けた方が旨いって言い出して今は本棚に眠ってるやんか」
近くの図書館。　家から歩いて１５分程の場所に私達はいた。
太陽はまだ真上に上がりきっておらず、時間で言えば１１時位だろうか？　あくまで図書館に入る前の話なのでひょっとしたらもう１２時を過ぎているかも知れない。
「それにや、私が探しとるんは料理本や無くて普通のファンタジー系のお話や」
「別にええやないか。　ほらほら、目の前に色んな宗教に喧嘩を売る最高のファンタジーがおるで？」
「……　しきの体験談は現実味がありすぎて楽しく無いやん」
「ががーん！」
足が悪く、あまり外に出られないはやてちゃんの趣味は読書だった。
特にはやてちゃんは魔法やらと言ったファンタジー小説を好む、『眼鏡男子と赤きエリクシル』なんて好みにドストライクだった見たいで借りるだけに留まらず態々本屋で購入する程のハマり様だ。
「私はこう……　魔法でババーンってするのが好きなんや、落ちこぼれ学生の学校生活なんて興味ない」
「は……　はやてちゃんハッキリ言うなぁ。　うち泣いてしまいそう……」
「しきが真面目に探してくれへんからやん……　なんか無いん？　しきが前に読んどった本とか……」

ファンタジー系で読んだことのある小説、それもはやてちゃんが読んだことの無いヤツ……　あるにはあるがはやてちゃんには少し早い気がした。
「……　図書館では見たこと無いなぁ」
「ふーん……　しきはえっちやなぁ」
「なんでや!?　違うやろ!?　其処は普通マンガとかを想像する筈やろ!?」
過程を数段跳ばして予想外の方向に向かったはやてちゃんの予想だったが最後まで話が続く事はなかった。
二人の間に影が差す。　二人で同時にギクリと体を震わせて後ろを見れば受付にいた筈のお姉さんが良い笑顔で此方を見ていた。
「しきのせいやで?」
「……　反省しとる」
その後、案の定受付のお姉さんに騒ぎすぎと注意されてしまい、急いで本を選んで退館した。

場所は移動して、本屋さん。　図書館からは少し遠いが苦痛に思える程の距離ではない。
はやてちゃんは私がお勧めした本のコーナー全体を見て一言。
「やっぱりえっちやん」
「いやいやいや、はやてちゃん!?　お姉ちゃんその本はお勧めして無いで!?」
そう、私がはやてちゃんを案内したのはライトノベルのコーナーだった。
私は必死にファンタジーバトルモノの小説を見せて弁解を図るが相変わらず少し軽蔑した様な視線を向けてくる。
「変なタイトルばっかりやし……　おっぱいのおっきなお姉さんばっかりやし……　これなんて痴女やんか」
「対象が中学生以降の男子やから……　まぁ多少はゆるしてぇな」
「うわっ、なんやこれ。　奴隷って……　ハーレムっ

て……」
「タイトルがアレなだけで面白い小説も沢山あるんやではやてちゃん！」
大慌てではやてちゃんが手に持っていた数冊の本を回収してもとに戻す。　比較的ソッチ方面ではない小説を持たせるのも忘れない。
「あ、この娘可愛いなぁ」
「ほのぼのファンタジーだから大丈夫や、お色気シーンとか無いで」
今一信じてそうに無いはやてちゃんの車椅子を押してレジに向かう。
……　しかし改めて見れば。　表紙とかタイトルとかだけを見れば、あんまりエロ本と変わり無い気がする。　ちょっとだけこれでは言われても仕方ない気がした。
「あ、しきストップ」
「ん？　なんや？」
車椅子を押すのを止めてはやてちゃんを見れば、とある本を手にして表紙を眺めていた。
「これやこれ、図書館にも置いてなかったし気になっとったんよ」
「ふーん……　どんな話なん？」
「私もあんま知らんのやけど……　今度映画化もされるくらい大ヒットしとった見たいやで？　予告映像みる限りはバトル物見たいやった」
「なんてタイトルなん？」
「しきも気になるん？　……　えっとそらの……　ああ違うわ」
――空（から）の境界っちゅうらしいで

◇◇◇◇◇

「おなかすいたなぁ……」
「そうやな、昼食べてへんもんなぁ……」

「かといって今からお昼にしたら……　夕飯食べれん様になってまうし……」
途中あった公園で時計を見た時、時計は2時半を指していた。　買い物をしていると時間が速く過ぎる、女の買い物は長いと言うが全くその通りだ。
二人して時計を見た瞬間から鳴り始めた腹の虫を笑ったが今では笑う余裕もない。
「……　なんか甘い匂いせん？」
「ほんまや」
匂いに釣られてそっちに行けば見えてきたのは喫茶店だった。
『翠屋』
そう書いてあるのが見える。
「な、なぁはやてちゃん……？　おやつやったら大丈夫やないかな？」
「せ、せやな、おやつくらいやったら……」
フラフラと二人で店の中に入れば美味しそうな匂いは強くなり自然とショーケースに向かってしまった。
「いらっしゃい」
「えっと……　ショートケーキを二つずつ……　あとカフェオレも二つで」
席につきお菓子を口に運ぶ。
ふんわりとしたショートケーキのスポンジの感触にコンビニ産とは違うなぁ……　とぼんやり考えながら二人で同時に口へ運んだ。
「「うまっ！」」
顔を見合せて互いに信じられない物を見た様な顔をして再びショートケーキを口へ運ぶ。
生クリームの甘さにイチゴの酸味が絶妙にマッチして……　月並みの言葉しか言えないがめちゃめちゃ旨い。
今まで何処も同じだろうと専門店にいかずコンビニで買ったり自分たちで作ったりしていたが……　これは今まで損をしていた様

な気分になってしまう。
「コレめちゃめちゃ旨いではやてちゃん！」
「うちで食べる分も買って帰ろうかなぁ……？」
「それがええ、夜ご飯の後にたべよ！」
店員のお兄さんに並んでいたショートケーキを箱に入れてもらう。
今日の夕飯の楽しみが増えて思わず顔も緩んでしまった。
店員のお兄さんが何か微笑ましいモノを見る様な目で見ていた様な気もするが気のせいだろう、気のせいだ。
気のせいったら気のせいだ。

◇◇◇◇

『午後は気温も暖かく――――――』
「ちょ！　反則や！　禁止！」
「禁止やないで～、もしかしたら来年には禁止になるかもしれへんけどな？」
「記憶の悪用や！　……　せやったらこうや！」
「なっ!?　そっちこそ禁止やないか！」
「まだ禁止や無いやろ？　まぁ？　再来月辺りには禁止かもしれへんけど？」
「ぐぬぬぬ……」
リビングでテーブルを挟んでカードゲームだ。　記憶を悪用する私に素で反則的に強いはやてちゃん……　その道の人が見たら目を見張る様なプレイングの嵐だが、交わされる言葉は正しく子供の喧嘩だった。
「……　詰んだわ」
「１１戦６勝っ！　しき、毎回毎回大人げないなぁ？」
「子供や、子供。　前も今も成人前や」
「足したらおっちゃんやん」
「おっちゃんやない！　どっちかっちゅうとお姉さんや！」
負けた方がカードを片付けるという私達ルールに従って私が片付

ける。
キラキラとしたカード達を見る、普通このぐらいの年の女の子っておままごとなんかで遊ぶのではないかという考えをしてしまった。
『犯人は未だに逃走中、警察は――――』
私が変な事ばかり教えるせいだろうか？　……　有り得る。
有り得るが、おままごとをはやてちゃんがしている姿は全く想像出来なかった……　そんな事をする位なら本物のクッキーでも焼いてそうだ。
「しき、今の聞いとった？」
「ん～？」
「なんや、小さい子供ばっかり狙う殺人鬼が脱獄したらしいで？
……　私ら絶好の的やないか？」
「大丈夫や、お姉ちゃん強いし」
「……　それ小説とかで言う死亡フラグってヤツやない？」
「男の弱点は誰よりもよう知っとるよ、大船に乗ったつもりで大丈夫や。　ほら、お風呂いこ」
はやてちゃんを連れてお風呂場に向かう、普通よりも大きなお風呂は私達が二人で入るには充分だ。
「どこ触っとるん？　やっぱりえっちや」
「ぐっふっふ、そうなんよー、シスコンを拗らせた悪いお姉ちゃんなんよー。　はやてちゃんのことを食べてやろうかー！」
「きゃ～、お～そ～わ～れ～る～」
冗談も程々に。　私達は一緒に身体を洗って湯船に浸かり、逆上せないうちに上がった。

『多量の血痕が付着した児童の服が発見され、警察はＤＮＡ鑑定を進めると同時に先ほどの脱獄犯との因果関係を――――』

魔法の呪文は？

「私、魔法少女になってみたいんや」
「……」
手をはやてちゃんの額に当てる。
……　熱は無さそうだ。　顔色も……　うん、可愛い。　何時も通りのはやてちゃんだ。
「熱ちゃうわっ！」
「はやてちゃん？　あかん、あかんで、そういうギャグはうちの役割や、はやてちゃんはツッコミやろ？」
「ギャグやない！　なんや、私やてまだ８才なんやで？　ファンタジーに憧れても良いやないか」
額に当てた手を振り払われ抗議される。　……　しかし、はやてちゃんも可笑しな事を言う。　８才と言うがはやてちゃんは私と同い年だ、双子だから当たり前なのだが……　そんな魔法少女なんて年齢では無いだろう。
「ええか、魔法少女っちゅうヤツはな？　小さい女の子しかなれないんやで？　はやてちゃんもええ年なんやからそないな事言ったらお姉ちゃん心配して――――」
「いや、８才ゆうたら十分小さい女の子の中に入るやろ？　むしろ早すぎる位やない？」
「なん……　やて？」
そんな事は無い筈だ、８才と言えば私と同い年。　つまりもう良い大人の筈……。
「しき？　普通の女の子はしき見たいに中身おっちゃんな訳や無いからな？」
「お、おっちゃんちゃうわ！」
盲点だった。　はやてちゃんが余りにも精神年齢が高く二週目である私とも普通に会話しているから全く気付かなかった……　そ

うだ8才女性といえば十分過ぎる程に少女だ、むしろ幼女だ。
「はやてちゃんが大人びとるから気付かんかったわ……」
「……　しきが子供過ぎるだけやろ？　私、しきの前世が本気で心配になってきたで？」
「ほ、ほら、精神は肉体に引き摺られるっちゅう話やし？　なんでそないな話を唐突に言いだしたん？」
残念なモノを見る様なはやてちゃんの視線に耐えきれなくなり話題を強引に戻す。　解らないのだ、眼鏡少年シリーズを読んでもそんな事を言い出さなかったはやてちゃんが何故魔法少女になりたいなんて言い出したのか。
「これや」
「こないだ買った本やんか、確かに魔法少女って言えば魔法少女やけど……　こんな非現実的な話であのはやてちゃんが本気で信じるとは思えんのやけど」
「……　いや、私にとっては超現実的な話やで？」
何言ってんだお前？　と、言いたげなはやてちゃんの視線が刺さる。
作品の内容は魔法少女ＴＳモノ。　ものすごくマイナーで性癖丸出しの作品なのだが設定はきっちりとしていてＴＳ好きじゃない人間でもすらすらと読める作品だ。
願わくばはやてちゃんにもＴＳの素晴らしさを知って貰おうとこの間買った小説の一つなのだが……　改めて考えれば姉が妹にオススメする作品では無い気がした。
……　しかし、しかしだ。　現実的要素なんて異世界モノじゃない位しかなかった様な気がするんだが。
「現実的要素なんて無いやん」
「いや、ほんまに解らん？」
「全く」
溜め息を吐かれた。　しき、頭空っぽやろ？　とまで言われムッとしたが私はお姉ちゃんだ、我慢する位わけない。
「この主人公は前世があるんやろ？」

「せやで」
「生まれ変わって女の子になったんやろ？」
「せやで」
「前世の世界と今世の世界は似ている様で違う世界なんやろ？」
「せやで」
「しきやん？」
「……　は？」
「いや、『は？』やなくて。　しきと一緒やんか」
何を言っているのか、こんなハチャメチャな設定の人物が私の訳がない。　はやては本気で私をなんだと思っているか。
一回死んで？女の子に生まれ変わって？前世の記憶も持ってて？前世とは似て非なる世界に住んでいる？　そんな馬鹿げた話が……。
って
「うちやコレぇぇぇぇ!?」
「いや、どう考えてもそうやんか」
呆れた様にそう言うはやてちゃんから小説を奪い取りパラパラと捲り始めるが……　似ている。
境遇、家族構成、年齢、記憶全てが似ているのだ。
魔法なんて有る訳無いと考えていた固定概念が木っ端微塵に砕け散った。
確かに、確かにだ。　此処まで似ているとすれば現実に魔法があったとしても何も可笑しく無い筈だった。
「成る程なぁ……　確かにあっても可笑しくない気がしてきたわ」
「せやろ？　それにしても私はてっきり、しきがわざと自分によう似た境遇の小説を紛れこませたんかと思っとったんやけど……なんや単なる布教目的やったんか」
「……　ソナイナコトナイデ？　ウチ、ソンナ小説シラン」
「さっき、小説の内容思いっきり知っとったやんか」
「あ」

しき、絶対頭空っぽやろ？　……　と言われてしまうが悔しくは無い。　頭空っぽの方が夢詰め込めるのだ、だから悔しくは無い。
精神年齢２０代後半が８歳児に馬鹿にされても悔しくは無い、無いったら無いのだ。
「魔法……　しきはファンタジー的素質はバッチリなんやから、なんか使えるやろ？」
「うむむ、せやかてはやてちゃん？　お姉ちゃん魔法の使い方なんて知らんよ？　頭の中に呪文なんて浮かんでこうへんし」
魔法が存在しないとも言い辛くなってしまったのだが、存在すると証明する事も難しいのだ。
物語の主人公が羨ましい、なんたって簡単に使い方が頭の中に閃くのだから。
「……　その辺の本の呪文っぽいヤツとかでもええんやない？」
「おお、それや」
急いでその辺の本から呪文が沢山載っている本を机に積み上げる。
はやてちゃんのファンタジー小説を筆頭に、私のマンガ、ゲームの攻略本とかもだ。
因みに例の小説は除外、頭の中に浮かんでくるってなんだ、そんなの全く浮かんで来ない。

「ほな、いくで」
私は庭に出て小説の設定資料集を開く、はやてちゃんは私の後ろで荷物持ちだ。
標的はさっき飲んだオレンジジュースの空き缶、万が一を考えそれ以外のモノは片付けてある。
魔法の杖の代わりは家に置いてあったすり鉢の棒だ。　すりこぎと言うらしい、はやてちゃんが言ってた。
大きく息を吐き前を見詰める。　幸せな思い出、はやてちゃんとの今の生活を思い浮かべながら私は大きな声で呪文を唱えた。
「エクスペクト！　パトローナァァァム！」
・

・
・
・・・・・・・ 何も出ない。
首を傾げはやてちゃんの方を見れば、はやてちゃんは何故か身体を震わせて俯いていた。
・・・・・・・ 発音が悪かったのだろうか？
「うえ・・・・・・・ ウエクウスペクトゥ・パァトロウンナァァァンムッ!!」
・・・・・・・ やはり何も出ない。
何時の間にか近くに寄って来ていたはやてちゃんに違う本を渡される、何故か瞳に涙を浮かべていたがどうしたのだろうか？ 余りにも完璧なお姉ちゃんの発音に感動したのだろうか？
今度は違う本だ、確か私が買ってきた死神マンガ。 魔法とは少し違う気もするがそれっぽいなら何でも良い。
「君臨者よ！ 血肉の仮面・万象・羽ばたきヒトの名を冠す者よ！ 真理と・・・・・・・」
――――待っててなはやてちゃん！今お姉ちゃんがこの世界の魔法、見つけたるから！

◇◇◇◇

「天光満つる所に我はあり・・・・・・・」
足を開き、大きな音をわざと発てる。 魔法はイメージだ、如何なる創作作品に置いても其処は変わらない。
「黄泉の門ひらく所に汝あり・・・・・・・」
片手を顔に当て、閉じた目の中に雷を映す。 天より来る最強の雷を。
「出でよ、神の雷!!」
目を見開きややオーバーな動きで杖を前に向ける、出来る出来る、

私には出来る。
天から降り注ぐ神の雷……　イメージはバッチリだ。
「インディグネイション！」
・
・
・
……　やっぱり何も出ない。
呪文の資料はこの攻略本で全部だった、やはり魔法など無いのでは無いかと言う考えが頭を過るがはやてちゃんのガッカリとした表情も一緒に浮かびそんな考えを振り払った。
もしかすると難しい呪文ばかり唱えたせいかも知れない、主人公だって一番始めは難易度の低いライターの様な呪文から入るのだ。
焦る必要は無い、私はただこの世界に魔法が有ると証明すれば言いのだから。
後ろを振り向くと何故かはやてちゃんが顔を真っ赤にして其処にいた。　消え入りそうな小さな声で「しき……　もうやめとこ？」なんて言っている。
確かに時間はもうすぐ夕方だ、晩御飯の仕度もある。
庭の空き缶を片付けて家に入ろうとしたその時だった。

「幼き少ぅぅぅ女達よ！　貴様等の修行！　見させて貰った!!」
家の入り口の影からスッと現れたのは中学校の制服を着て真っ黒な仮面を着けた少年だ。
黒いマントに黒い仮面、中学校の制服も黒っぽい色なので黒々づくしの如何にも厨二っぽい感じの少年だった。
「幼きながら未知に挑むそのスピィリッツ！　一寸の狂いも無いその詠唱ッ！　実にッ！　実に美しいッ！」
バサリッ……　と両手と共にマントを広げたその格好は一体何度練習したのか、なかなか様になっていた。
「しかし……　気を付けるが良い……　貴様等が深淵を覗く時、深淵もまた貴様等を覗いているのだから……！」

ふはははは！　とマントを翻し高笑いをしながら去っていく少年を眺めていたが、はやてちゃんがツンツンとつついてきた事で正気に戻った。

「……　家に入ろか」

「……　せやな」

はやてちゃんの顔は真顔だった、私の顔も真顔だろう。

今日は何も起きなかったのだ、何もなかったのだ。　はやてちゃんと仲良く遊んだ、それで良いじゃないか。

庭の片付けを明日にして、何故か無性に疲れた身体を引きずり家に入った。

「……　はやてちゃん、今日のうちってあんな感じやったん？」

「……　しき、ごめんな」

「……　ええんやで」

その日の夜ご飯はちょっとだけしょっぱかった。

死を視る眼

時間はお昼過ぎ、私とはやてちゃんは二人で前に借りたり買って来たりした本を読んでいた。
チラリとはやてちゃんの方を見てみれば何かを考える様な顔をしながら小説を読んでる最中だ。　読めない漢字でも有ったのだろうか？
私は今読み終わった本をソファーの上に置いて次の小説に手を伸ばす。　……　ああ、駄目だこれは別の小説の続きだ。
もう一度はやてちゃんの方を見れば私が読もうとした小説、その上巻を読んでいた。　その表情は先ほどから変わらず難しそうにしている。
仕方ないと、はやてちゃんが読み終わった小説コーナーの中から読んでいない小説を探す。
見つかったのは読んでいないと言えば読んでいないが確かに読んだと言える小説……　私がはやてちゃんに進めたライトノベルだった。
ＴＳモノのあの小説ではなく、女の子のほのぼのとした異世界転位ファンタジーだ。
内容は覚えているが、拍子全て覚えている訳ではない。　何せ１０年近くは読んでいない作品なのだ……　それに女の子になった今だからこそ共感出来る部品もあるかも知れない。
まだ見ぬ新しい発見に若干胸踊らせながら小説を開いた……
その時だった。
「しき。　しきって一回死んだんやろ？」
なんて、はやてちゃんの声が聞こえてきたのだ。
「せやで、どないしたん？」
一ページ目で声をかけられた事を残念に思いつつ、一番始めのカラーページを開く。
いきなり新しい発見だ、カラーページに描写されている場面が違う。　前がどんなシーンだったかは朧気にしか覚えていないが、異世

界で家を買うシーンではなかった筈だった。
「死んで生まれ変わる時ってなんか見たりしたん？」
「あー……　どうやったかなぁ？　なんか見た様な見てない様な……　あ、此処も違うなぁ……　絵は基本的に違う感じなんかな」
見た、見てない、はやてちゃんが何を言っているのか小説に集中していて今一解らない。
始めの数ページで絵以外の違和感が無いことを少し残念に思いつつページをさらにめくる。
「ひょわっ!?」
めくろうとした所で小説の上から手が出てきた、こんなホラー染みたビックリギミックは搭載されていなかった筈だ。
手の元を辿って行く、其処には心配そうに此方を見詰めるはやてちゃんがいた。
「しき、ちょっとだけ真面目な話や。　何を見たん？」
「な、なにって……　死んだ後の話やろ？　そんなん覚えて……」
覚えて……　いる。
酷く心地の良い真っ黒な世界、それ以上に真っ黒なナニか、そして私を見下ろす誰か、あとは……。
あとは……　何があったんだっけ？
はやてちゃんに思い出せなかった最後の部分を省いて説明する。
それを説明するとはやてちゃんは小説のとあるページを急いで読み進め、再び此方を向いた。
「しき、変な線とかって見えへんよね？」
「線……？　しわやのうて？」
「線なんかな、線やと思う。　何や黒くて……　夜でもやたらハッキリ見える線」
「なんや、ソレも小説に書いてあった事なん？」
「そうなんやけど……　なんか予感がするんよ」

「やめてや、はやてちゃんの予感は変に当たるんやから」
大声で呪文詠唱をし続けるというなかなかの羞恥プレイを昨日した後なのだ、あまり小説を当てには出来ないのだが……　はやてちゃんの感は当たる。
　些細な事から重大な事まで……　今考えてみれば『あの時』だってはやてちゃんの予感は当たっていた。
　ソレが決まって悪い事という訳ではないが、それでも『あの時』の事が頭を過り嫌な想像が止まらない。
「線……　線なぁ……　見えへん」
「……　ホンマに？」
「ホンマに」
「テーブルとかテレビとか……　ソファーにも？」
「全然見えへんよ？」
　目を凝らして見るが全然見えない。　何時も通りの家具があるだけだ、其処に線なんて全然見えなかった。
　はやてちゃんは安心したとばかりに大きく息を吐き、良かったとだけ言った。
　私からすればさっぱりだ、はやてちゃんの心配事の元となった小説は見た事が無いので当然だが。
「めっちゃ気になるんやけど……」
「ごめんな、しき。　ネタバレになるからあんまり言いたく無いんやけど……　この小説の主人公が一回死にかけたんよ、死んだって言っても良い位に」
「はっはーん……　解ったで？　せやからうちにも主人公が使える様になった特殊能力的な何が使える様になっとるかも知れんって予想した訳やな？」
　やけに心配していたのは副作用か何かがあったからだろう、不思議を呼び寄せるとか、記憶が無くなっていくとか……　お姉ちゃん思いの妹を持って涙が出そうだ。
「よくよく考えてみればありえへんよな。　しきに見えるんやったらとっくの昔に発狂しとるか死んどるもん……　ホンマに良かっ

たわ」
「……　え、なんやソレめっちゃ怖い。　邪神でも呼び寄せるんか？」
「なんでも万物の『死』が見えるらしいで？　線や点みたいな形で」
「なんやソレ、曖昧過ぎて解らへん」
解らんのやったら小説読んでからのお楽しみ、なんてはやてちゃんは言って再び小説を見始めた。
……　それにしても『死』か。
『死』……　あの真っ黒な『ナニか』が『死』だと言うのだろうか？　多分違う、アレはもっと優しかったというか……　とにかく違う気もする。
『死』を『視よう』と近くに置いてあるジュースの入ったペットボトルを見てみるが……『死』なんて怖いモノ、何処にも見えなかった。
手に取り中のジュースを飲む。
「……　ん？　なんやこれ？」
ビニールで名前や成分表が書かれている部分、其処に不思議な黒い『穴』を中心に『模様』が走っているのが視える。
私は何となくその黒い穴に指を突っ込んで……。
「……　え？」
ペットボトルだけが突然消えて無くなったのを見た。
ベチャリ、と中身のジュースが私の身体に降り注ぐが関係無い。
消えたのだ、完全な消失、訳が解らない。
「し……　しき？　眼が……」
青ざめた顔で此方を見ているはやてちゃんが見えた。　何かを言おうと口をパクパクさせている姿は……　空気を読んでいない考えかも知れないが金魚みたいだ、ご飯を上げたら食べるかも知れない。
「は、はは、ごめんなはやてちゃん……『視えて』しもうた……」

◇◇◇◇

私は『模様』……『線』をなぞる。

手に持つのはペーパーナイフだ……　包丁やサバイバルナイフに比べ切れ味など皆無に等しい筈のそれは手応えなど無く、本当に容易く対象をバラバラにする。

ソレはいずれ廃棄する予定だった幼児用の小さな椅子だ。

材質は金属。　所々塗装が剥げ、錆びてしまっているが専用の工具無しに容易く切断出来る代物ではない……　ペーパーナイフなど論外だ。

だから、私とはやてちゃんは空いた口が塞がらなかった。

「うわぁ……」

本当にスパスパと切れていく金属製の椅子に、新聞紙を破いた時の様な快楽を覚えてしまいそうになりうすら寒くなる。

こんな事に快楽を覚えてしまうのは不味い、何時か人を切って見たいとか考えてしまいそうだ。

細かく切った椅子だった物一つ一つの『穴』、すなわち『点』を突いて消していく。

あまり細かくし過ぎて辺りに跳んだらいけないと考え、やや大きめに切っていたこともあり片付けは簡単に終わった。

……　それにしても。

「……　これ、粗大ゴミとか処分するのに便利そうやな」

「って、違うやろ！」

はやてちゃんからの良いツッコミが入る、擬音を入れるなら『ビシッ！』だろう、間違いない。

「もっとこう……　なんかないん!?　自分の力に怯えたり、世界が崩れる幻覚が見えたり、目を潰そうとしたり!?」

「うわ、なんやソレ怖いわ」

「今私が一番怖いんは、しきの精神構造や！」

絶対異常者スレスレやで……　なんてなかなか失礼な言葉を言いながら興奮するはやてちゃんをドウドウと落ち着かせる。
確かに怖い力だ、どんなモノでも殺せてしまうのだから。　はやてちゃんの話を聞く限りこの目は有機物だろうが無機物だろうが、実態だろうが概念だろうが、人だろうが神だろうが関係無しに殺せてしまう恐ろしい物らしい。
死を視るというのは精神的にもかなりの負担があるようだ。　急いでインターネットで調べたはやてちゃん曰く寿命も大幅に縮み早く死んでしまうらしい……　私にはこの『点』や『線』が其処まで恐ろしい物には全く見えなかったが。
「ああ、どないしよう……　魔眼殺しの眼鏡って通販で見つかる物なんかな……　はよせんと、しきが……　しきが死んでまう……」
「そんなに危ない物なん？　この眼」
「当たり前やろ!?　死が見えるっちゅう事は死に近いっちゅう事なんやで!!　そうやなくても自分自身の線や点に何かの拍子で触ったりしたらって思うと……」
確かにそれは困る。　日常生活で触った物全部がスパスパ切れたり消えたりしていては生活しにくいなんてレベルではない。　それにはやてちゃんが言うには死を視ている私の眼は『青く光っている』とか……　どう考えても眼に悪そうだ。
「せやったら『死』を視んようにしたら良いんやろ？」
「ソレが出来たら私はこんなに必死になって魔眼殺しなんてありもしない様な物探したり……　なんで元に戻っとるん？」
「……？　視ようと思うから視えるんやから、視んようにしたら普通に見えるもんなんやないの？」
「……」
それにしても何かと便利な力が手に入ったものだ、いやこの場合は眼に入った……　というべきか。
この眼があれば外出した時にゴミが出たとしても安心、家でもわざわざゴミ箱にゴミを捨てに行かなくても済む……　発想力が乏し

いせいかゴミ関係しか思い付かない。
「はやてちゃん、これから粗大ゴミとか出す事になったらうちに言ってや。　すぐに片付けるで」
「……　もう知らん、疲れた」
「え？」
先ほどまで一心不乱にパソコンを弄っていたはやてちゃんは自分の寝室まで進み始めた。
私が呼び止めようとも聞く耳もたずといった様子で寝室に進むはやてちゃんに首を傾げる。　何か怒らせてしまう様な事を言ってしまったのだろうか？
心配になって寝室に行ってみるが返事は無し、仕方なく私は小説の続きを読み始めた。

結局、はやてちゃんは夕食の時間まで出てこず、出てきたら出てきたでやたらと不機嫌な様子だった。

「なぁ、お姉ちゃんなんか悪い事したんかな……？」
「……　なんも、ただ私の心配はなんやったんやろうなって」
「……？」

青い宝石

台所に置かれた食材、カボチャを睨みつつ考える。
「これ……　料理には使えへんかな？」
「しき、本気で言うとるんやったら台所にもう入れんで？」
「いやいやいやっ!?　よう考えて見てやはやてちゃん、この眼があったら固い食材とか簡単に切れるんやで！　ちょっと形は不恰好になるかもしれへんけど……『点』は突かんから、『線』だけやから……　な？」
「当たり前やろ『点』突いたら死んでしまうんやから……　どっちにしろダメや、死んだ食物なんてどんな影響があるか解ったもんやない」
「そんなに怖いモノやない気がするんやけどなぁ……」

最近の日常の一コマである。

『直死の魔眼』……　そんな異能に目覚めてしまった私は、この眼を有効利用する方法について考えていた。
『万物を殺せる眼』なんて言われてもさっぱりだ、少しだけこの小説の主人公に憧れるのも仕方がない事だろう。
正直な話、私にはサッパリ『死』というモノが理解出来ないのだ。
医学的に脳死の状態が死だと言う事は理解出来る……　だが小説の主人公の様に概念的な『死』を理解出来るかと言われれば全く理解出来ない。
主人公よりも『死』に近づき、多分、主人公よりも本当の意味で『死』んだにも関わらずだ。
何か条件でもあるのだろうか……　と頭を捻らせるがまるで解らない。　……　私の頭が悪いだけという可能性もあるが。
「『死』ってなんやろうな、はやてちゃん」
「……　世界中探しても私だけやろうな、一回死んだ人間に『死』が何かを聞かれるっちゅう体験は」

はやてちゃんは暫く考えた後にあの小説、『空の境界』の一ページを開いて見せた。　場面としては主人公が『死』が何かを理解……というか死がどんなものかを体験させられているシーンだ。
「こんなんやないん？」
「うーん……　こんなんかなぁ」
「なんやソレ、しきが見てきたんやろ？」
「彼処が『死』……　うーん」
「……　いや、私は死んだ事無いから知らんよ？」
ソレっぽい描写のシーンを探してくれているのか小説をパラパラと捲るはやてちゃん。
私も思い出そうとするが思い出せるのは真っ暗な世界に真っ黒な『ナニか』それから自分を見下ろす誰かに……？
記憶の中に『穴』が見えた。
巨大な『穴』だ、私なんてちっぽけな存在を飲み込んでしまう程の巨大な『穴』。　そのなかには光なんて『視』えないし『観』えない真っ黒で深い、奇妙な『穴』。　ソレを『ミ』ようと『メ』を開こうとして……。
「案外、しきの頭が悪過ぎて解らんかっただけなんやないの？」
「……　うえ？」
「……　しき？　どないしたん？　『直死の魔眼』なんて使って」
眼前に広がった模様だらけの世界に目をパチパチとさせた。
普段なら視ようとしなければ視えなかった模様に驚き、急いで視るのを止める。
「あ、えーっと……　点を見続けたら『死』ついて解るかもって考えたんよ」
嘘だ、私はただ考えが全く思い浮かばなかっただけ。
ただぼんやりとしていただけだ。
「あんまり使ったらダメやで？　何が起こるか解らないんやから」
そう言った後、はやてちゃんは暫くの間、私と一緒に『死』について考えていたが結局全く解らずに時間だけが過ぎていった。

◇◇◇◇

「はやてちゃんも人使い荒いわぁ……　うちみたいな可愛らしい女の子に、あんな遠くまで一人で本を買いに行けやなんて」
ぷらんぷらんと本の入ったビニール袋を揺らしながら家に向かって歩く。　中身は『月姫』という名前の漫画だ。
なんでも『空の境界』を書いた人がストーリーを手掛けた漫画なんだとか、この本も『直死の魔眼』を持った主人公が出てくるらしい。
はやてちゃんに、そんなに気になるんなら別の話も買って来たら良いやんか……　と言われて追い出されてしまったのだ。
絶対私の煮え切らない態度に嫌気が差して追い出したに違いない、今度からはやてちゃんの前でこの話題を出すのは止めようと思う。
……　それにしても、あの店員さんや近くのお客さんの驚いた顔は何だったのだろうか？　確かにあの作者さんの作品なのだからある程度はグロテスクだとは思うが……　それにしたって驚き過ぎだ。
結構直接的な描写が多い……　なんて店員さんも注意していたが関係ない、ちょっとグロテスクなだけで大袈裟の様に感じた。

「……　なんやコレ」
道端、詰まる所道路の真ん中にナニか光るモノを見つけた。
青く透き通ったソレはまるで宝石のようだ、宝石には作られた番号なのか大きく『I』が刻まれている。
「うわぁ……　綺麗やな、コレ」
キラキラとしたその宝石を太陽に翳して見れば更に綺麗に輝く。
キョロキョロと誰も見てない事を確認してポケットに納めた。
……　はやてちゃんに良いお土産が出来たかも知れない。
一応渡す前に消毒して……　なんて考えていると後ろの方から声が聞こえた。
「待って……　っ待ってくださーい！」

茶髪で、おさげの、なぜか既視感を覚える少女に何処かで会っただろうかと首を傾げた。
運動が下手なのか、何度か転けそうになりながらも一生懸命走ってくる
「あ、あの！　さっき青い石を拾ったと思うんですけど……」
「……　あ、もしかして『翠屋』の娘さんか？」
「にゃっ!?　どうして知ってるの!?」
どうやら当たったらしい。　よくよく見れば店員のお兄さんに似ているというか、面影がある気が……　そう言えば店の奥によく似たお姉さんもいた様な気もする。
「いやな、最近お店の方に行かせてもらったんやけど……　其処の店員さんにより似とる様な気がしたんよ」
「あ、ありがとうございます……？」
「お兄さんとお姉さんにケーキめっちゃ美味しかったって伝えとってーな。　また近い内に買いに寄らせて貰いますって」
ニコニコと自分でも完璧と誉めたくなる様な笑顔で
手を降りその場を後にする。
……　出来るだけ早足で、だ。

「って!?　なのは！　上手く誤魔化されてるよ!?」

男の子の声が後ろから聞こえた……？
はて、男の子なんて居ただろうか？
後ろから女の子の慌てた様な声が聞こえる。
「すいません！　貴女がさっき拾った青い石なんですけど……
実は私の知り合いの落とし物で……」
「なんや、誤魔化されへんかったか……　冗談やで、冗談……　はい」
私は仕方なく、本当に仕方なく彼女の掌に宝石を乗せる。　はやてちゃんへのお土産が消えてしまった事に少し落ち込むが……　これで良かったのだろう。

こんなに綺麗な宝石が誰かの落とし物じゃない方が不自然だ。
……　逆に持って帰って仕舞えばはやてちゃんに怒られてしまう処だったかも知れない。
「え……　あ、あの……　ありがとうございます！」
「ええんやで。　どっちかっちゅうと猫ババしようとしたうちが謝らんといけんのやから」
ほなな～……　と、手を降り彼女と別れ十字路を右に進む。
それにしても中々可愛らしい女の子だったと思う。　少しドジっ娘な所も高ポイントだ、物語で言うならばヒロイン枠間違いない無しだろう。
まぁ、はやてちゃんには敵わないが。
「……　あ、またケーキとか買って帰るのもええかもしれへん。
丁度あの娘もおるし」
お財布の中身を確認する。
ひいふうみい……　お金の方は大丈夫そうだ。　二人分いや、三人分はあるだろう。
彼女にはちょっと意地悪な事をしてしまったし、お詫びをするのも悪くない考えだと思った。
……　口止め料ではない、絶対に。
「なぁ？　なのははちゃんやったっ……」
曲がった十字路を逆走し、彼女の下に駆け寄ろうとしたが……
足が止まってしまった。
見たのだ、桜の様に綺麗な光を。

「ジュエルシード……　封印完了っ！」

「はぁ……　今回は何事も無くて良かったね、ユーノくん」
一体何時着替えたのか、先程の服とは似ても似つかない服を身に纏った彼女が其処には居た。　肩に乗せた小動物と親しげに会話なんてしている。
桜色の光を従えた彼女に目を奪われ……　慌てて塀の影に隠れ

た。
ヒラヒラとした服、言葉を話す小動物、如何にもな杖……　間違いない。
「ま、魔法少女や……　本物や……」
テンプレ通り、明らかに不思議な光景が繰り広げられていると言うのに近くの家からは物音一つせず静まり返っていた。
これも魔法のなせる技なのか。
「良かったねじゃないよ、なのは……　もしぼくが言わなかったらどうする気だったんだい？」
「にゃはは……　ごめんなさい、『次からは気を付けます』」
「はぁ……　ジュエルシードが『願いを叶える』前だったから良かったものの……」

「……　なんやて？」
声をかけるべきか、否かと悩んでいると聞き捨てならない言葉がとんできた。
『願いを叶える』……　あの宝石が？
あの宝石が物語に有りがちな願望機だとでも言うのだろうか？
……　だとすれば、本当に惜しい事をした。
アレがあれば何でも意のままだったではないか……　もしかしたら回数制限なんてモノはあるかも知れない、だが。
私にはたった一度だけでも良い。　たった一度だけでも充分だった。
「あっ！　あーなのはちゃんやったっけ？　まだそっちにおるー？」
「ふぇっ!?　は、はい！」
パシュンと何かの音が聞こえ彼女の声が聞こえた。　魔法少女のお約束、衣装が元に戻る音だろう。　それを証拠に彼女の服は元に戻っていた。　相変わらず小動物は肩に乗っけているが。
「あー……　さっきの話なんやけどな？　うちも物を探しとる娘を放って置くっちゅうんは心苦しい物があるんよ、やから……

『他の宝石』を探すの、手伝わせてくれへん？」
「あ、その……　危ないかも知れないですし……」
「そんな危なくあらへんよ、道端に落ちとったら届けるだけやから……　あ、なんか特徴とかあったりするん？　場所が限定されているとか……」
困惑気味の彼女を言葉攻めにして情報を搾り取る。
少し可哀想になってくるが仕方がない、宝石の為、願いの為だ。
全部で２１個、色は全部青、全ての宝石にシリアルナンバーが振ってあり……　そして場所はこの町全体。
範囲が広すぎるとも思ったが……　まぁ何とかなるだろう。
最悪、数個の場所は知っているのだから。
「じゃあ今度こそ、ほなな～」
手を振って別れる。　不気味な程静まり返っている町を走って帰る。

――――待っててな、はやてちゃん。　今、お姉ちゃんが足直したるから。

「ねぇ、なのは……　今あの娘、結界の中を歩いてなかった？」
「ユーノくん……　私、あの娘にジュエルシードが沢山あるって話したっけ……　？」
遥か後方で聞こえた二人の会話は、私の耳にはもう届かなかった。

殺人鬼の探求心

「……っ！」

ちゃんと聞いておけば良かった。

お母さんの言い付けをちゃんと聞いておけば良かったんだ。

入っちゃいけないって言われてたのに……行っちゃいけないって言われてたのに……。

ごめんなさい、ごめんなさいお母さん。

「これからはちゃんと良い子にします……お願いです……神様……」

大きなゴミ箱の影に隠れる。息が続かなくて、これ以上走れなくて。

右手を押さえる、指が五本有った筈の場所を、無くしてしまった二本が有った筈の場所を必死に押さえる。

血が止まらない……。

「死んじゃう……死んじゃうよぉ……」

痛くて痛くて、痛くて痛くて痛くて痛くて痛くて痛くて堪らない。

何度おまじないを掛けても痛くて堪らないし、血だって止まらない……転けた時は簡単に痛く無くなったのに、血だって止まったのに。

後ろから物音が聞こえた。

悲鳴を上げそうになった口を押さえ込み何とか声を出さないようにする。

「何処に行ったんだいお嬢ちゃん……オジサンはただ、お嬢ちゃんに聞きたい事が有るだけなのに……」

目を瞑り、ただただ震えて身を小さくする。見つかったら何をされるか解らない、解らないが……きっとひどいことをされてしまう。

暫くして……何の音も聞こえ無くなった。

助かった？　助かったのだ。

もう何の音も聞こえない、あとはこのまま見付からない様に帰れば良い……　帰れれば……　またお母さんに会える。　お父さんに会える。　学校にだって行けて……　先生にだって、友達にだって、また……！

「ひどいなぁ……　お嬢ちゃん、お母さんやお父さんに教えてもらわなかったのかい？　困っている人を助けてあげましょうって？」
「ひっ……！　がぁ……　っ……!?」
「ひどいなぁ、ひどいなぁ、ひどいなぁ、ひどいなぁ。　オジサンはね？　ただ教えて貰いたいだけなんだよ、知りたいだけなんだ。　知りたくて知りたくて堪らないだけなんだ」
息が出来ない。　首をこわいひとの手が押さえ付けて息が出来ない。
こわいひとのてを必死にどけようと、あばれてもはなれない。
「しっ……　や……　っ!?」
「ねぇ、『死ぬ』ってどんな感じなんだい？　オジサン解らないんだ、生きている人には幾らでも感想を聞けたんだよ。　例えば生きたまま焼かれる感想、生きたまま砕かれる感想に切られる感想に、生きたまま食べられる感想……　でもねお嬢ちゃん？　死ぬって感想を聞いた事がないんだ」
くらくらとしてまっくらに……　なにもみえなくなって……　おかあ

「そうだよ！　お嬢ちゃん！　今の感想を！今の！今の!!　早く早く早く!!!　ああ……　力が入り過ぎてしまった。　可哀想に、潰れてしまっているよ……　可哀想に」

――ああ、駄目だ。　また、食べてあげなくては。

◆◆◆◆

「なぁ……　しき、これ……　その……」
「あ、あー……　せやな……　えっと……」
詰まる会話、お互いに視線はソレから外され何を言っていいのか解らなくなってしまっている。
見なくても解る、きっとはやてちゃんの顔も、もしかしたら私の顔も真っ赤になっているだろう。
急いでページを捲ろうと指を動かすが、反対側を持っているはやてちゃんの指が全く動かないためページが変わらない……　それどころかチラチラと見ている始末だ。
「あかん……　あかんよはやてちゃん？　うちらまだ子供なんやから……」
「あ、やっぱりえっちな……。　せ、せやな、飛ばそ、飛ばして読も」
私達が二人で読んでいたのは一冊の漫画だった。
『月姫』……　そう書かれた漫画、私達にとっては娯楽に収まらない資料とも呼べるべき物なのだが……。
青年向けの漫画なのだ。
もう一度言う、青年向けの漫画なのだ。
私は何を勘違いしたのか、青年向けという言葉の意味を半分しか解っていなかったのだ。
ただグロテスクな表現のある作品で、ほんのちょっぴりエッチな表現があるだけの……　分かりやすく言えば乳房が正確に書かれているだけの作品だと思っていたのだ。
それが……　まさかここまで直接的な表現が有るとは思っていなかった。
その……　主人公がヒロインの……　アソコを舐めるとか、最後までヤっちゃうとか……　全くの想定外だった。
あの時はやてちゃんの言葉を振り切り私一人で読めば良かったと思っても後の祭り。　どうやら私ははやてちゃんに大人の階段を一

歩上らせてしまった様だ。
「あー……　これでしきの魔眼についての知識も高まったし……　ええんやないかな？」
「せ、せやな。　うちはちゃんと『死』を見れとるみたいで良かったわ……　いや、あんまり良くないけど」
ぎこちなく続く会話。
私はわざとらしく咳をして立ち上がった。
「この人の作品は同じ世界で起こっとる話みたいやから他の作品も買ってきた方がええなー、一人で買ってくるわー」
暗くなる前には帰ってくるで～……　なんて言いながら家をでた。
……　決してこの妙な空気に圧されて出ていく訳ではない。

◇◇◇◇

「あ、これはアニメ化もされとるんか……　うーん」
『ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』と書かれた漫画を手に取り一人悩む。
型月作品の中でも特に有名な話らしいソレは、私を今最高に悩ませていた。
「『プリズマ☆イリヤ』……『ｅｘｔｒａ』……『Ｚｅｒｏ』？　それに……　うわ、幾らなんでも多すぎやろ……」
『ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ』という一つの作品から分岐した所謂『過去』の話だとか『ｉｆ』の話だとかが多すぎるのだ。　おまけにその『ｉｆ』の話にすら後日談だとかファンディスクだとかが付いて私の頭はオーバーヒート寸前だった。
「うぅぅ……　こんなん絶対足りひんよ……　来月？　いや、全部揃えよう思うたら来年までかかるんやないかコレ……」
コツコツと貯めてきた私の全財産、ガマちゃん財布はここ最近の大盤振る舞いにより、以前の丸々と太っていた姿は見る影もなくペタンとしている。

持ち運びは非常にしやすくなったのだが……　なんとも情けない姿になったものだ。
「月姫見る限り、ゲームはきっと１８禁やろうし……　でも漫画を買うには少なすぎる……　アニメはアニメではしょっとる所もありそうやしなぁ……」
トボトボと仕方なく家に向かって歩を進める。
時計を見ればもう3時だ、ちょっぴり早いが……　まぁ中々の時間潰しにはなった様な気がする。
「はぁ……　どっかに願いを叶えてくれるボールでも落ちてへんかなぁ……　ん？」

……『願いを叶える』？

っあ。

「あああああぁぁぁぁ!?　うちのアホ!!　何忘れとるんや！　ジュエルシードやジュエルシード!!」
完ッ全に忘れていた。　幾ら一日以上たったとは言え、あんなハプニングがあったとは言え簡単に忘れすぎではないだろうかと自分を攻める。
時間は3時、日没迄にはたっぷり時間がある。
探すとすれば公園の茂みの中や路地裏、まだ魔法少女ちゃんが探していない所だろう。
「急がんと急がんと……」
個数はまだまだ余裕が有る筈だ、２１個もあるのだからもう一個ぐらい私が見つける可能性だってまだまだある筈だった。
あの可愛らしい魔法少女に頼み込むのは最後の手段にしたかったからだ。　……　断られた時の場合も含めて。

午後6時。　路地裏。
空を見ればどう考えても暗く何時はやてちゃんのお怒り電話が掛

かってくるか戦々恐々としている。
肝心の成果は、というと……　0だった。
シリアルナンバー0を見つけたという訳ではない。　完全に0だったのだ、全く見付からなかった。
気分は最悪だ。　きっと今から帰ってもはやてちゃんには怒られてしまうだろうなぁ……　という考えも浮かんできた。
……　噂をすれば、だ。
細かく振動し私に着信が有る事を知らせてくれた携帯を見つめ溜め息をつく。　怒鳴られても良いように音量を下げて電話に出てみれば……　聞こえてきたのはやはり怒鳴り声だった。
『しき!!　なんですぐ電話に出ないんや!　今何時やと思っとるん!?』
「6時……　やな。　そんな怒らんといてぇな、ちょっと探し物に夢中になっとって……　うん」
これ以上遅れるなら夕御飯は抜きとか、納豆は私が全部食べるとか……　地味に痛い罰を並べられて思わず苦笑いだ。
『はぁ……　でも無事で良かったわ……』
「なんや大袈裟やなぁ……」
『大袈裟やない!　脱獄犯のニュース見てへんの!?　昼に女の子のバラバラ死体が見つかったんやで!?　行方不明の女の子も5人になったって言うし……　ええから早く帰ってくるんや!』
「解っとるよ……　急いで帰る……　?」
音が聞こえた。
何かを啜る様な奇妙な音だ。
『しき……　?　しき?』
ズルズルと聞こえた奇妙な音はやがてニチャニチャと何かを咀嚼するような音に変わった。
薄暗い路地裏、時間も時間だ向こう側は見えづらくなってしまっている。
身体中が警報を鳴らし、走って逃げようとした時に……　ソレは現れた。

「なぁ、はやてちゃん……　脱獄犯ってどんな容姿やったん……？」
『どんなって……　身長は二メートル以上で、痩せ気味、髭を生やしたお爺さんってくらいしか……』
「ああ、そうなん？　それで手足が異常に長かったら完璧やったのになぁ……　っ!?」
後ろに跳んだ。　過去最高の跳躍だったと思う、何せ私は何ともないのだから。
距離的には五メートル以上は離れていた筈だ。　これもどう考えても人間離れした手足がなせる技なのか。
化け物の手に当たってしまった携帯が宙に浮かぶ。　元々私を引き寄せる気だったのか、携帯はカラカラと音を立てて化け物の方へ転がって行った。
『しき！　しき!!　お願いやから返事をして、しき!!』
クシャリと踏み潰された携帯、如何なる心境だったのか首を傾げた化け物はやがてどうでも良いかとばかりに私を見つめた。
「お嬢ちゃん、お嬢ちゃんなら教えてくれるだろう？　オジサンは知りたくて知りたくて堪らないんだ、ねぇお嬢ちゃん？　ねぇ――――」
――――『死ぬ』ってどんな感じなんだい？

海よりも深く

私はもう何度も同じ事を繰り返してきた。
私が初めて物心という物を学んだ場所は少なくとも『日本』という場所ではなかった。
字もなく、本もなく、言葉すらも危うい……　そんな場所に生きていた。
当時から私は知りたがりだった、知らなかった事、経験の無い事にはどんどん取り組んでいく質だった。
母に愛される子供の気持ち、子を愛する父の気持ち。　虐げられる者達の気持ち、支配する絶対者の気持ち。
私はどんな立場にも立ち、彼等が一体どのような気持ちなのかを知りたかった。
人の感情という難解なモノは私の欲求を充分に満たしてくれていたのだ。
否定される気持ち、反逆される気持ち、目の前で妻と子を犯され殺される気持ち……　無惨に殺される者の気持ち。
残念でならなかった、本当に残念でならなかった。
もう知れない、もう解らない。　私の欲求が満たされないまま死ぬ事が残念でならなかったのだ。

そして私は……　死なない者の気持ちを知った。

驚愕だ、自分は死なない怪物なのだと予想出来る訳がない。　同時にこれ以上に無い程に喜んだ。
知れると。　もっと知れると。　もっともっともっともっともっともっともっと知れるのだと。
知って知って知って知って知って、知って知って知って知って知って、知って知って知って知って知って知って知って知って知って知り尽くした。
知り尽くして……　限界に気がついた。

私が知ったのは私の感情だけだと、これ以上私の欲求を埋める為には私ではなく他人の感情が、繰り返せない人間の感情を知らなければならないと。
その為にはどうすれば良いのか、簡単な話だ。
聞けば良い、聞けば解る。
どのように産まれ、どのように生き、どのように死に……　全てが、私以外の視点で知れた。
しかし……　それでも限界はくる。　今までよりもずっと早く。
私の欲求は満たされた……　完全に、とは言い難いが。
何かを見落としている感覚、それに気付いた時……　私の欲求は悲鳴を上げた。
知らないのだ。　知らないのだ。
私は『死』を知らない。
死ねないのだから『死』を知れなかった。
だから私は聞くしかない。
死を知る彼等に、先ほどまで産まれてすら居なかった彼等に、聞くしかなかった。

――――死ぬってどんな感じなんだい？

◆◆◆◆

私の日常は最近ファンタジー染みてきた。
私自身、産まれ変わりという体験もして中々にファンタジーな女の子だと言う事は自覚している。
『直死の魔眼』『魔法少女』『願いを叶える石』……　何ともファンタジーだ、類は友を呼ぶ……　という奴かも知れない。
それでも……　私がこんな目にあう理由にはならない様な気がするのだ。
小さな身体を活かし、狭い路地裏を全力で走る。

殺されると直感で解った。　アレは間違いなく人間ではない。
「あははっ……　絶対聞く気っ……　ないやろアレ」
ガリガリと凄まじい音を立てながら此方に迫ってくるのは紛れもない化け物だ。　手足が異様に長い事以外は普通の人間だ、差別的だ……？　差別だろうがなんだろうが知った事ではない。
ならば異様に長い手で地面を『削り』ながら此方に迫ってくるモノを他に何て呼べば良いのか、私はアレを人間なんて呼べる気がしなかった。
人間らしい所といえば先ほどからずっと何か言葉を話している位だ。
ぶつぶつと聞こえる化け物の声に耳を少し傾けて後悔した。
「待ってくれよお嬢ちゃん……　教えてくれるだけで良いんだ、教えてくれるだけで良いんだよお嬢ちゃん待ってくれよ待ってくれ待って……」
「ひっ!?」
前言撤回、あれは絶対に言葉じゃない、少なくとも会話に使う言葉ではない。　呪詛だ。
此方を呪い殺さんとばかりに呟かれる呪詛である。
アレで死ぬ気持ちを教えてくれと言われてもお前を殺してやるの不思議な言い回しにしか聞こえ無い。
例え道を教えてくれと言われても逃げ出す自信が私には有った。

「へぅっ!?　～～～っ!!?」
ゴッ、と鈍い音が聞こえチカチカと頭に星が浮かぶ。
後ろばかりに気をとられたせいで道を間違えたかとも考えたがそもそも此処は一本道だった筈だ、行き止まり何て有る筈がない。
「はぁ!?　なんやこれ!!」
それに手を伸ばし驚愕する、ふざけるな何も無い場所に壁なんてあって堪るか。　透明度１００％視覚的には一切何も無い筈なのに『何か』が道を塞いでいるのだ。
後ろを振り返る、化け物は私がそれ以上進めないことに気付いたの

か速度を緩め、ゆらゆらと迫ってきていた。
時間がない。
「ああっもう！　誰かの家と繋がっててても堪忍してやっ！」
視界に広がる『穴』と『模様』。　見えない壁が私の前に空中に浮かぶ『穴』と『模様』として映し出された。
『穴』に指を入れればあっという間だ、見えない壁は消失する。
縮まっていた距離を離す為に背後すら見ずに全力で駆けた。　路地裏の先、通りに出てしまえば人がいる……　奴も追っては来ないだろうと。

……　そんな考えが甘かったのだ。
吐き気がする程にファンタジー。
薄暗い時間帯だと言うのに何処の家にも明かりはなく、車一台処か人っ子一人いない異常な風景が其処には有った。
走る、走る、走る。　誰もいない町を走る。
一体どれだけ走ったのか、走りに走ってやっとたどり着いたのは見知った場所だった。

家の近くの公園だった。

「あかんっ！」
……　当然と言えば当然の話だったのかも知れない。
私が一番速く走れる場所は当然私のよく知っている場所であり、それ即ち家の近くだ。　逃げるという事にしか頭が回っていなかった。
後ろを振り返り急いで家から離れる、離れなければならない……　はやてちゃんを危険にさらす訳にはいかないのだ。
離れようとして、大きく踏み出した足は地面を捉える事が出来なかった。
衝撃、痛み何て無く私の身体は塀に叩きつけられる。
意識が明滅し世界の全てが朧気になる。

何かに首を締め付けられていると何となく解るが不思議と苦しくはない、身体中が可笑しくなってしまっているのか。
うっすらと見えたのは私の首に手を回し、何かを必死に叫んでいる化け物だ。　その姿はまるで必死に神へ祈りを捧げる信者の様にも見えた。
沢山の『穴』が視界一杯に広がり……　私の意識は黒に染まった。

・
・
・
「……!!　……!!!」
「……し……き……」

霞のような意識の中で声が聞こえた。

視界に広がった『穴』が消えて行く。

『穴』が消え、映し出されたのは二つ。

数十メートル先で相も変わらず叫ぶ化け物と……　苦しそうに顔を歪める……　はやてちゃんだった。
必死に此方に手を伸ばす、はやてちゃんだった。
はやてちゃんの体に浮かぶ『穴』と『模様』が急速に数を増やしていくのが見える。　数秒と経たず『穴』と『模様』は、はやてちゃんの身体の半分を覆い尽くした。

はやてちゃんが――――死ぬ。

……　それは駄目だ。

「うちを……　殺せばええやろ……？」

はやてちゃんが死ぬくらいだったら私は命を差し出す。

百回だって千回だって……　それ以上だって殺されてやる。

死が知りたいのだったら幾らでも教えてやる……　だから……　だから……。

「やめてや……　盗らんといて……　はやてちゃんを……　はやてちゃんは……　うちの大切な妹なんよ……」

はやてちゃんの手がダランと落ちる。

はやてちゃんの眼が閉じられた。

「ぁ……」

魔法少女なんているくせに正義の味方はやって来ないし……

願いを叶える石も無い。

黒い模様の死神が誰かを連れて行かねば気が済まぬとばかりにはやてちゃんに広がっていく。

私はそれが……　うちはソレが、絶対に許せんかった。

「……　ふざけんなや」

――――――お前が死ネ

◆◆◆◆

「うちの妹に何してんねん、バケモン」

それは突然の出来事だった。

長く細い、化け物の様な者の化け物の様な腕が……　手首がズレる様に落ちる。

彼は後ろに跳んだ。　跳ばなければならないと彼には備わっていない筈の何かが告げていた。
「なんやコレ……　おとんやおかんが守ってくれてるんかな……？」
彼の両手に収まっていた筈の少女を抱いて『ナニか』が少女を、正しくは少女の隣にある空間を見ていた。　……　其処に何かがあるように。
『ナニか』は少女を優しく寝かせると再び此方を観た。
彼には解らない、彼女の事が解らない。
数瞬前まで数十メートルは離れていた筈の彼女が突然現れた事ではない。　もっと根本的な事だ。
逃げられない彼女を放り、新しい少女に、良く似ている少女に『質問』をするべく離れていた間に……　一体何が有ったというのか。
青く光二つの眼が此方を観ていた。

『死』だ。

理屈ではない、本能で感じ取る。

アレは『死』だと、『アレが』死だと。

「おおぉ……　おおおおおおおおぉぉぉぉ!!!!」
満面の笑みで化け物は両腕を広げ走り始めた。　目の前の理想を求める為に、『死』を知るために。
自身の病的な知的欲求を埋めるために化け物は走る。　人間には不可能な速度で、化け物にすら本来は不可能な速度で。
「死を!死を!死を死を死を死を死を!!!!　私に『死』を教えてくれ!!!!
死だ死だ死だぁぁ!!!!」

「知るかアホ」

青い光が僅かに揺れる。
速度を殺し
衝撃を殺し
身体を殺し
霊魂を殺し
全てを殺し尽くした

「勝手に死ね」

……　音はなかった。
消失、彼の全てが消えていく。
身一つ残らない、彼そのものの消失。
彼は消える間際、表情を変えた。
先程までの狂気的な笑みではなく、穏やかな、優しげな笑みだ。
それが自身の知的欲求が満たされたからなのか、それとも死ねない身体から開放されたからなのかは解らない。
「なに笑ってんねん……　アホ」

何とも言い難い、やるせない気持ちに包まれて、しきはゆっくり『眼』を閉じた。

約一時間後、彼女達は匿名の通報により発見され病院に運ばれた。
救急車が到着した時、通報した誰かは其処にはおらず隊員達は疑問に思いながらも彼女達を運び込む為に行動を開始する。
空に浮かび、青く光る石を持った金の少女と狼に気付かないまま……。

短くて長かった軟禁生活

「なぁ、はやてちゃん？　……　お姉ちゃん、そろそろ外に……」
「だめや」
「あ、あー！　めっちゃお姉ちゃん散歩しとうなっ……」
「駄目や」
「な、なんか買いに行くもんが有ったらうちが……」
「ダ・メ・や」
完全封殺。
私が退院した翌日に我が家に現れた可愛らしい鬼は私の要求を悉く却下してきた。　買い物に行くのもダメ、散歩に行くのもダメ、本を返しに行くのもダメ。
ダメダメダメダメ……　外に出る行為は全部ダメだ。
まぁ、あんな事があったのだから納得は出来るのだが。

殺人鬼の一件。　私達が殺されかけたあの事件から既に一週間が経過していた。
はやてちゃんに聞く所によれば、私は三日間程目覚めなかったらしい。　起きた瞬間はやてちゃんから抱き締められ二人して泣いたのを覚えている。
外傷が一切なかったにも関わらず三日間眠り続ける私をはやてちゃんが見守っていてくれたみたいだ。
私は数メートル蹴り飛ばされ、はやてちゃんはあんなにも『模様』が身体中に回っていたにも関わらず一切外傷が無かった。　はやてちゃんに至っては病院に運び込まれた翌日、何時も起きる時間に目を覚ましたらしい。
病院の人も、事情を聞きにきた警察の人も困惑していた。　それはそうだろう端から見れば夜遅くに女の子が二人でただ眠っているだ

けだったのだから。
……　私とはやてちゃんが覚えていないの一点張りで、尚且つ外傷も一切なかったせいも有るに違いない。
……　そう、外傷が無かったのだ。　私達二人共。
原因らしき物の予想はついていた。
それを手に取り良く見てみる。
十字の紋章、其処から伸びる様に十字に巻かれた鎖……　私達が物心ついた時から家にあった一冊の奇妙な本だった。
『眼』で見てみれば解る。　何時の間にか本に浮かぶ『模様』がはやてちゃんの方にも伸びているのを、はやてちゃんと本が何かしらの繋がりを持っているのを。
あの夜、はやてちゃんが『模様』に覆われていた時に『模様』が何処かに流れていくのを見た。　まるではやてちゃんを必死に死なせまいとしている様に見えたソレは、今尚はやてちゃんと繋がっている。
それが私には両親が残してくれた守りの様に見えたのだ。
都合の良い解釈かも知れないが魔法なんかが有る世界だ、こんな事もあっては良いのではないだろうか？
「この本、大事にせなあかんよ？　はやてちゃん」
「しき……　素直に頷いて欲しかったら先ずドアノブから手を放してな」
……　どうやらバレていた様だった。

◇◇◇◇

外出禁止令から更に時は過ぎ、とうとう5月後半になろうかと言う所……　私は焦っていた。
願いを叶える石、ジュエルシードの探索は一切出来ていない。　もう既になのはちゃんが集め終わっているという事は無い筈だ……　多分。　流石に一日一個ペースでは無いだろう。　数が少なくなっていけば見つかり難いだろうし魔法なんてファンタジー

な案件だ、人手も足りないに違いない。
唯一の問題は我が妹、はやてちゃんだった。

「オソトデタイ」
「ダメ」
「オソトデタイ」
「アカン」
「デル」
「アカンって」
「〜〜〜っ！　出たい出たい出たい出たいっ！　ぜったいに出るんや〜〜〜っ!!」
「……　はぁ、子供やないんやから」
「今は子供やっ！」
秘策中の秘策、石の上にも三年作戦である。
まるで欲しいモノを買って貰えない幼児の様にただひたすらに要求し続ける……　これが『石の上にも三年作戦』の全容である。
姉としての威厳、元学生のプライド、その他諸々棄ててはいけない物を火にくべながら実行されるこの作戦の成功は確約された様なモノだ。　成功しなきゃ泣く、それはもうわんわんと。

「ああっもう！　うるさいわっ！」
十数分後。　ついにはやてちゃんが折れた。
夕方までに『絶対に』帰る事を条件に外出が許されたのである。
思わずガッツポーズをした私は悪く無い筈だ、はやてちゃんが小さな声で何やら物騒な事を言っている様な気がするが気のせいという事にした。
「大丈夫、大丈夫や！　殺人鬼ももうおらんし……　うちもちゃんと反省しとるから！」
「ほんま……　？　変な事に巻き込まれたりせん？」
「うち、嘘ついたこと無いやろ？」
「沢山あるで」

「多分気のせいや」
外出許可を出して尚渋り続けるはやてちゃんを何とか宥め外へ出た。
晴れ渡る空……　という訳にはいかず少々雲っているがまぁ問題は無いだろう。
雨が降ってきた時の事も考えて傘入れから傘を取り出した。　可愛らしい動物がプリントされたソレを持つことに抵抗は無い。　もう慣れてしまった。
目指す先は幾つもあるが……　一番に向かわねばならない場所がある、魔法少女なのはちゃんがいる喫茶店『翠屋』だ。

「……　え？　なんやて？」
耳を疑った。　目の前にいる魔法少女こと高町なのはちゃんの口から出てきた言葉が上手く聞き取れなかった。
「あの……　もう全部集め終わってて……」
一瞬視界が真っ白になりその場に崩れ落ちそうになる。
約1ヶ月、たった1ヶ月だ。　普通魔法少女モノとは一年間や半年を目安に区切られているモノでは無いのだろうか？　何回も同じ時間をループしている人が居るわけでも無いのに余りにも短すぎる。
これではまるで2クール目が既に決定されている様な短かさだ。
「そうや！　もう一回見せて貰ってもええ!?」
パンが無いならケーキを食べれば良いじゃない。
1クール目でダメなら2クール目を起こせば良いじゃない。
某マリーさんが言ったと広く考えられている言葉的な考えが頭の中に思いつき即座に実行に移す。
……　それに、元々考えていた事でもある。
はやてちゃんに間違いなく怒られるからやらなかっただけであり、多分出来ないという事はない。
如何に相手が魔法少女とは言え、私にはこの『眼』がある。　逃げ

られないという事はないだろう。
持ち逃げする気満々な私であったが誤算があった。
小さな誤算はなかった事に出来る位の『眼』を持ってしてもどうにも出来ない大きな誤算。
「もう持ち主が持って帰っちゃって……」
「……はぅ」
既にこの場に無いという考えられて当然の事を考えていなかったのだ。
真っ白になる頭、今度こそ崩れ落ちる身体を支える術は私にはなかった。

◇◇◇◇

なのはちゃんが心配している様な声で語りかけてきた。 卒倒する一歩手前、余りの展開の速さに私の頭はついていけてなかったのである。
「あは、あははは……見つかったんなら良かったわ見つかったんなら……」
心境的には……なんと表現すれば良いのだろうか？ 卒倒する一歩手前、余りの展開の速さに私の頭はついていけてなかったのである。
「あは、あははは……見つかったんなら良かったわ見つかったんなら……」
心境的には……なんと表現すれば良いのだろうか？ 魔王が民衆の反乱で死んだ世界の勇者？ それとも道中で放置された中ボス？ ……どれでも同じ様な気がする。
何にせよ終わってしまった話なのは確かだ。
ふらりと立ち上がり半回転、ふらふらとその場を立ち去る。
後ろから聞こえてきた心配する魔法少女ちゃんの声に適当に返事を返してその場を後にした。

「もう6月やなぁ……はやてちゃんの誕生日や」
テレビから聞こえてきた言葉で今日の日付を知る。
はやてちゃんの誕生日、6月4日までもっと先かと考えていたがそんな事は無いようで、もう目と鼻の先だった。

誕生日プレゼントは足の完治……　なんて今更ながらに良いアイディアだと思う。　本当に勿体無い事をした。
願いを叶える石なんていう最高の誕生日プレゼントが消えてしまった今、何の準備もしてこなかった私に
ははやてちゃんにあげられる誕生日プレゼントが無いのだ。
「あぁ……　どないしよ」
どうせ手に入らないのだったら探すべきではなかったという考えすら浮かんできた。
探さなければ化け物に襲われるという事もなかったし、はやてちゃんの誕生日プレゼントの準備もとっくの昔に終わっていた筈なのである。　後悔先に立たずとはよく言ったものだ。
「やめや、やめ。　こんなん今更考えてもどうしょうもないわ」
考えるべきははやてちゃんへのプレゼントだ。
女の子が好きそうな物を適当にあげれば良いじゃないかと思うかも知れないがそうはいかない。
あの『はやて』ちゃんへのプレゼントなのだ。
はやてちゃんへのプレゼントは私にとって毎年頭を悩ませる難題である。　……　というのもはやてちゃんは正直な話少々『女の子』らしくない。
趣味は読者、カードにゲームと前者はともかく後者は何とも言い難い。　偏見かも知れないが普通男の子が好きな物ではないだろうか？
かと言って男の子みたいかと言われればそうでもない。　家事全般は車椅子に乗っているにも関わらず1人でも楽々とこなすし……　そう、女の子らしく無い訳では無い、子供らしく無いのだ。
「前は何あげたんやったっけ？　……　あ、はやてちゃんの好きな小説セットやったわ」
前回は結局思い付かなくてはやてちゃんに直接聞いた事を思い出した。　どうやら考える時間は関係なかった様だ。
あーでもない、こーでもないと考えていると一店の洋服店が目に

入った。
何となく店に入り、ぼんやりと洋服を見る。　服も良いかも知れないと考え始めたのだが……　一着のパーカーの前で足が止まった。
たぬたぬパーカーと記されたソレは名前の通り狸を意識しているのだろう、フードには狸の耳の様な飾りがポケットには狸の尻尾の様な装飾品がついてあった。
頭の中ではやてちゃんにこのパーカーを着せてみれば何故か似合うのだ。　はやてちゃんの可愛さを更に引き立てる力が間違いなくこのパーカーにはあった。
「オバちゃんコレにするわ！　ラッピングは誕生日プレゼントのやつや！」
おばちゃんはニコニコしながらラッピングをしてくれた。　沢山の花柄が描かれた可愛らしいモノだ。
実に良い買い物をしたと上機嫌で帰り道を歩く。　問題はそれまで隠しとおせるかなのだが……　帰って考えれば良いかと後回しにする。
『6月4日』はやてちゃんの誕生日を楽しみにしながら歩く帰り道は何だか随分と短い距離の様に感じた。

幕間　私の幸せ

私の姉は私の姉ではなかった頃があるらしい。
年が離れていれば当たり前の話だ。　だが奇妙な事に私達は双子、一卵性というらしく本当にこの世に生まれ落ちたのは同時だったのだ。
では何故か、産まれて間もない頃に手違いで姉が妹として扱われていたとかそう言う事ではない。
かと言って物心つく前に別々の場所で育てられていただとかそう言う訳でもない。
姉は以前の記憶、姉が姉になる前の記憶を持っていたというだけなのだ。
所謂前世、俗に言う生まれ変わり。　姉は脳科学……　というか全ての科学に真っ向から喧嘩を売る様な人だった。
その事で家族の仲がギクシャクした事すらあった。
姉は抜けている、マイペース、正直者……　オブラートに包まなければバカだ。　そんな姉は恐らくその言葉が招く混乱だとかそう言ったモノを一切考えずに発言したに違い無い。
自分は『誰か』の生まれ変わりだと。
姉がそう言った時の言葉はハッキリとは覚えていない。　だが似たような言葉を言った筈だ。
当時の私はまだ幼く、何となく『おねえちゃんすごい』程度にしか考えていなかった。
普通その言葉は余程頭のネジが跳んでいる人間くらいしか真に受けない言葉だっただろう……　だが姉は普通では無かった。
幼稚園に入る位の子供が新聞を読み、パソコンを操作している光景は普通では無いだろう。　私が知っているだけでも姉の年齢に合わない行動はまだまだある……　両親はさぞ不気味だったに違いない。
両親は姉に対する接し方が解らなくなり、姉は寂しそうにしている

事が多くなり、私はそんな姉と両親の間で不安になっていただけだ。
まぁ……　ギクシャクした期間は恐ろしく短かったが。
解決方法は単純明快、姉もそう言う意図があった訳では無い偶然の出来事にして必然の出来事。
姉がそれをした途端にギクシャクした家族関係は、家族の溝は一瞬で埋まりまた何時も通りの日常が帰ってきたのだ。　まるで魔法のように。
姉は泣いた。　それはもうわんわんと。
悲しくて泣いたのだ。　構って貰えなくなったから、ちょっとだけ距離を置かれたから……　そんな『子供』っぽい理由で。
それを見た両親は姉に謝りながら泣いて、そんな三人を見た私も泣いてしまって……　何か私が言った様な気もするがもう覚えていない。
良い思いでだ。
もし姉が前世を話さないままだったなら姉は心の何処かに罪悪感を抱えたままだっただろう。
もし姉があの時泣かなかったなら家族の溝は永遠に埋らないままだっただろう。
私は、私達は一生後悔していたに違いないのだ。

私の姉はファンタジーだ。
前世を覚えているという事もあり、既に随分とファンタジーな姉ではあったが……　つい最近、ファンタジー具合に拍車をかけ始めた。
小説を読んでいた私はその小説の主人公が他人事とは思えない課程を経て能力を獲得していた事を知ったのだ。
『死』を経て能力に目覚めたのだ。
『直死の魔眼』ありとあらゆるモノの『死』が見え、否が応でも保持者に『死』を見せ続ける拷問の様な能力に。
嫌な予感がした。　創作の世界、有り得る筈の無い力……　そう断言出来ない理由が直ぐ近くに居たのだから。

姉に聞いてみる……　案の定見えていた。　否、見えてしまったのだ私のせいで。
その時ばかりは冷や汗が出た。　調べれば調べる程録な事が書いていないのだ。
死に近い、死にやすい、寿命は長くない……　そんな言葉は見たくなかった。
格好いいという書き込みを見て書いた奴を殴りたくなった。　格好いいものか、こんなものは只の呪いだ。
私が殺してしまう、私が教えてしまったばっかりに姉を殺してしまうと半泣きで調べた。　姉を死なせない方法を。
結果的に私の一人相撲だった訳だが……　あの時は本当にどうしようかと思った。
何時もと同じ様な何も考えていない提案をされた時は何とも言えない無気力感に包まれてしまったが、私は悪くない。

私の姉は私を大切にしてくれている。
自惚れでは無い筈だ。　姉はなんというか……　私に対して過保護だった。
私の足は動かない。　沢山の医者が匙を投げた足を絶対治る筈と夜遅くまで医者を探してくれていたのを知っている。　今の先生、石田先生だって姉が見つけ出してくれた先生だ。
姉は学校に行っていない。
面倒だからと言う理由で学校に行っていないのだ。
嘘は言っていない、だけど本当の事も言っていない。　姉は解りやすいのだ、嘘は簡単に、隠し事をしているのは直ぐに解る。
ただ内容は解らない……　露骨に話を反らして会話にならなくなるのだ。　姉なりの知恵という奴なのかも知れない。
それを私が心配で学校に行っていないと考えるのは……　流石に自惚れだろうか？

姉は私の為ならきっと犯罪だって平気でやる。

あの夜、私は薄れる意識の中で姉を見た。
化け物見たいなオジサンの両腕をなんの躊躇も無しに切り落とした姉を、あの時の姉の目に宿っていた本当に恐ろしく優しい『何か』を。
オジサンを殺し尽くした姉の姿を見た。
『願いが叶う石』そんな夢物語見たいな石を探し回っていたのも知っている。
姉は私に隠そうとしていた様だが……　あれだけキラキラとした目で『願いが叶う石があったら何願うん？』とか『もし足が治ったらどうするん？』と聞かれれば誰でも怪しいと気づく筈だ。
家から出して貰えなかった理由の半分は夜中に『一日だけ借りてもバレへんやろ』という犯罪にしか聞こえない言葉を呟いていたからという理由なのだが……　姉は気づかない様な気がする。　姉が気付き、今後こう言った無自覚の犯罪予告を言わなくなっても心配なので黙っているが。

大体、私は今でも充分に幸せだ。
両親に生き返って欲しいなんて願いを持っていないと言えば嘘になる。
足が動いて欲しいという願いが無いと言えば嘘になる。
それでも今の私は充分に幸せだ。
姉と……　しきと遊んで、泣いて、笑って……　一緒にいるだけで――――
――――私は充分に幸せなのだから。